

---

# この世界に

瀬川愛以

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この世界に

### 【Nコード】

N1815F

### 【作者名】

瀬川愛以

### 【あらすじ】

わたしは、君と出会って、すごく変わった。

この世界に、海と陸の割合が七対三。

わたしの頭のなかも、いつも、わたしのことよりきみのことばかり。

「向井さん、あなた、その成績じゃここは無理よ」

担任の西野先生が高校のパンフレットを机の上に置いた。ばさりと音がしたのは、先生はあきれているのよ、といったかったのかもしれないなかった。

さすがに無理なのかもしれないなかった。

わたし、向井陸は、頭が悪かった。中間試験の点数もだれにもいってなかった。

友達は、みんな頭がよかった。

「やだ、全然だめだよー」

といえるのは、実際はだめではないからだった。わたしは一回もそんなこといえなかったし、いわなかった。

わたしは海が見える道を静かに帰った。夕焼けが海に近づいてきている。

海星高校に行きたかったのにな。わたしのため息がひとつ浮かんだ。

この街は、海沿いにある。港町らしい青い空と潮の香りが広がっている平和な街。

海星高校は、海が見えるゆるやかな坂のうえにある。

あたしはコンクリートの上に座った。

波と風がおしよせるこの場所に来ると、頭のなかからっぽにな

る感じがする。

倉田先輩、元気にしてるかな。

倉田知先輩は、わたしのふたつ上で、今高校二年生。わたしが一年生のとき、倉田先輩が三年生で、委員会がいつしよになった。

体育祭で、倉田先輩の走っている姿はすごくかつこよかった。

足が速くて、背が高くて、かつこいい倉田先輩。

話したことはなかったし、おそらく倉田先輩にとっては知り合いにもなっていないと思うけど、わたしはあの日からずっと倉田先輩を見ていた。

先輩が卒業するときにも、なにかできたわけじゃなかった。

それから、先輩が海星高校に行ったと風のうわさで聞いた。その日から、わたしは海星高校を目指すようになった。

ため息がもうひとつ浮かんだ。

「あーあ」

口に出したらもっと、あーあ、という気持ちになった。

白いセーラー服は、夕日を受けてオレンジに光っているように見える。

秋のはじまりは、憂鬱になる。

わたしはコンクリートの上に立ち上がった。それから何歩か歩いてみた。

なにも変わらないとはわかってる。

わたしは海の方をむいた。ぼーっとしていたら落ちそう。

もう、いつそのこと、このまま、ここで、死んじゃおうかしら。

「向井」

我にかえると、名前を呼ばれたような気がした。振り返ると、自転車に乗ったたしか違うクラスの少年がこっちを見ていた。

本当に死ぬと思われたかも、と不安になったけど、落ち着いて地面に下りることができた。

「なに」

「そつちこそ、なにしてんの」

わたしは思わずうつといてしまいそうになった。自殺ではないけれど。

「べつに」

わたしはそつぽをむいた。なれなれしく話しかけてくる男の人がきらいだから。

「向井の下の名前、陸っていうんだ」

わたしはびっくりしておどろいた顔をしてしまった。でも、かばんに名札がくっついてるのに気がついて後悔した。

「そうよ。だからなに」

なんでわたしはこんなにつんとした態度をとっているんだとは思ったけれど、べつにいいかとも思った。

自転車の少年は小さくあ、そといったかと思うと自転車に乗って行ってしまった。べつに、行ってほしくないわけではなかったけど。

それからしばらく海を見ていた。

「向井」

なんだと思ったらまたあの少年だった。

「なによ」

わたしはしつこいなあ、と思いながらいった。答えるのも面倒になっっていた。

「なんで、海見てんの」

「なんで、って海が好きだからよ」

わたしがそういうと、少年は首に手をまわして赤くなりながら海を見た。

「あの、さあ」

少年がその姿勢のままいった。わたしは適当な顔をしていたと思う。

「おれ、春日海<sup>かすがうみ</sup>」

なんで自己紹介をしているんだと思ったけど、とりあえず聞いていた。

「おれ、向井のこと、陸って呼ぶから、おまえもおれのこと、海って呼べよ」

わたしは、ああ、はいはいと聞いていたけど、途中で頭がまわった。

「はあ？　なんでよ、やだ」

わたしは少年　　春日海にかみついた。春日海はちょっと笑っていた。

春日海は、陸、また明日といいながら自転車に乗って去っていた。

わたしはなんだか疲れていたもので、ふたたびコンクリートに座った。ため息がまたひとつ浮かんだ。

もう帰る。疲れた。帰ったらすぐ寝る。ひとりで宣言し終わったところで立ち上がった。

しばらく歩いていると、今さっき見たような背中があった。

「陸」

無視しようとかんばっていたけど思わず顔をむけてしまった。

「乗ってく？」

春日海は自転車の後ろを指さした。

「乗らない！　それに、ふたり乗りは、禁止なんだからね！」

わたしはむきになって大声で叫んだ。そのまま早足で歩きだした。春日海がにやにやしているような気がして、もっと早足で歩いた。

春日海、か。

わたしはさっき、海が好きだといったことを思いだして、しまったと思って、走った。

なんだか毎日がしんどい、と感じはじめたのは、たしか十月あたりだった。

「ねえ、あやこ亜夜子、春日海ってしってる？」

わたしは亜夜子を見上げていった。

「しってるよ。つか、おなじ小学校だったし」

亜夜子は計算機の上で指をすばやく動かしながらいった。亜夜子のめがねから見える目はまっすぐに机の上の書類をとらえて、まばたきすらしていないように見える。

かわしま川島亜夜子は、計算が好きなのだ。

あまりの計算好きで、ほんとなら絶対に計算などしないはずの数字まで、かたっぱしからたして、ひいて、かけて、わる作業をやっていないと落ちつかないみたい。

彼女の計算機は、まるで携帯電話のようにつるつるした赤で、亜夜子のめがねとおそろいだ。千円以上したといっていた。

もちろん、その千円も亜夜子のおこづかいからひかれて、そのあともいろいろな計算に登場していたんだろう。

結局、亜夜子とはずっと同級生してたってことになる。

「なに？ 春日海がどうかしたの？」

亜夜子はひと仕事終わったのか、こっちに顔と体をむけた。めがねの奥の目がわたしをはつきり見ている。

「いや、べつにその、どうってわけでも、ないんだけどさ？」

わたしはなんだかもごしながらいった。その様はきつと幼稚園児みたいだったと思う。

亜夜子はそのままの姿勢でぴくりとも動かなかった。わたしの目はあちこちを泳ぐのでいそがしかった。

「うそ。なんかあるでしょ」

亜夜子からは逃げられないと思った。

「告白、しちゃった」

亜夜子はわたしの目を逃がさなかったが、はじかれたように口を開いた。

「ちょっと待つて。なにそれ、ほんと？」

「いや、だからね。こないだ、帰りに会って、なにしてんのっていわれたから、海が好きだから海見てるっていつちゃって、そいつが海なんて名前だなんて知らなかったから、だから、その……」

亜夜子はぶつとふきだした。

「なにそれ、うける。向井ほんと天然だね。いわれない？」

「ねえ、いいかげん陸って呼んでよ。よそよそしいよ」

「いいじゃん、べつに。もう慣れちゃった」

そうこうしているうちに、数学が始まるうとしていた。

「でも、いいよね。かすがうみなんて、男なのにかわいい名前でさ」  
わたしはため息といつしよにしゃべった。

「あの人、まえアメリカに住んでてよ。小三のとき、転校してきた」  
亜夜子は授業が終わってもなお計算機と格闘している。いや、むしろ遊んでいるのか。

「ふうん……」

そうか。じゃあ、英語が得意なんだろうな。わたしがしばらく書けなかったアルファベットと、昔から遊んでいたんだ。

三年生の秋はいそがしいな。

毎日がめぐるなかにわたしひとり残されてる感じ。

帰るときの気持ちはすごくセンチメンタルだ。異常にものがなし、風がすべて奪い去っていくよう。

「りくー」



わたしは振り向いた。自転車をすつとばしたやつがこっちにむかってくる。

「ああ、やっぱり陸じゃん、なんで返事しないの」  
なんとなくわかってはいたが、春日海だった。

なんだか、もやもやする。元気な人とは話したくない気分なんだよね。

「なに？ 元気ねーじゃん」

なんだかイライラしてきた。なんでこんなにのー天気なんだろう、こいつ。わたしが意味のわからないことでなやんでいるのに。

「わたし、いろいろつかれてんの。あんたと話してる元気ないの。わかる？ てか、何の用なわけ？」

そつだよ。春日海なんてふわふわした名前のやつと話すこともないはずだよ。むかむかしてきた。

「なに、いろいろって？」

「たとえば……」

なんだか急にセンチメンタルがもどってきた。海の上で波がゆれている。生まれては消える、はかないもの。

消えるために生まれてきたのかのように。  
人がいつかは灰になっていくように。

この世界に、絶対なんてないんだ。

倉田先輩。海星高校。亜夜子。波。わたしのあこがれるものはたくさんある。

たとえ、かなわなくとも、願うのは自由だ。

もしかしたら、倉田先輩が、わたしのことを覚えていてくれるかも、とか。

たとえ、かなわなくとも

。

「たとえば……」

あ。

あ、泣きそう。

どうしょ。

「わたし、その……好きな人がいるの」

わたしはコンクリートの上に座った。泣きそうなのをごまかすのには話すしかないと思った。

春日海も予想してはいたけど、となりに座った。

「二年上の先輩。委員会がいつしよになったの、二年まえ。いまは、海星高校に行ってる。でも、あそこ、レベル高いから。わたし、頭悪いのよね。なんか、ゆううつ。ため息ばかり」

春日海がわたしの顔を見た。わたしの目は波だけを見ていた。あごとひざをくつつけて。

夕陽が波に消えていく。今日は、あつちにむかって終わる。

春日海が立ちあがった。わたしは思わず彼の顔を見上げた。

「陸、しあわせ？」

わたしの口が少しずつ開いていく。

わたし、しあわせ？

わたしは黙って首をふった。灰色の地面しか目に映らなかった。

「それ、恋？」

わたしの頭が真っ白になった。

「しあわせじゃないのって、恋なの？」

わたしは動けなかった。春日海は自転車に乗って行ってしまった。

わたしはひとり、波の音をきいていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1815f/>

---

この世界に

2010年11月20日02時52分発行